

文化論集第24号
2004年3月

書 評

川中子弘（著）『ブルースト的エクリチュール』
（早稲田大学出版部，2003年）

吉 田 城

本書の著者である川中子氏は、筑摩書房版『ブルースト全集』別巻「ブルースト研究・年譜」（1999）においてジョアン・テレサ・ロザスコの論考を翻訳しているが、その補注において、次のように書いている。「ブルーストの言語は、物語展開や理路を辿る線条的読みの前では頑なに沈黙してしまう。その閉じられた豊かな世界に忍びいるには、主人公も探していた開け胡麻の呪文が必要なのだ。」同氏のテキスト戦略はまさにこの言葉に集約されていると言ってもいい。たしかに、『失われた時を求めて』は筋書きを追って読んでいくだけでは、表面的な意味しかとらえることはできない。この小説には優柔不断なある青年の成長の物語が書かれているにすぎず、一般読者を熱狂に誘うような波瀾万丈のストーリーも、重大な歴史事件もない。けれどもひとたび「開け胡麻」の呪文を手に入れるや、離れた挿話を裏でつなぐ仕掛けや、一見些細な言葉に隠された深い意味が、次から次へと明らかになり、新しい展望が見えてくる。それがブルーストのエクリチュールの魅力と言っても過言ではない。

その意味で本書はひとつの冒険物語である。ステューヴンソンやジュール・ヴェルヌの小説のことではない。誰もがだいたい知っていると思いこんでいる小説『失われた時を求めて』に潜んでいる隠れた意味のネットワークをあぶり出すという、斬新な読み方を提示している点で、冒険的なのだ。こうしてもう一つの『失われた時を求めて』をわれわれに開示しているがゆえに、評論であると同時に物語の性格を帯びている。これを現代の多様な批評世界のどこに位置づけたらよいのか。もちろん、本書が主として欲望や同性愛や母子相姦などに照準を定めていることから察せられるように、一種のセクシュアリティの探究、すなわち精神分析的な読みであると見ることは可能である。とはい

え、フロイトからマリー・ボナバルト、シャルル・モーロンを経てラカンへと至る「正統的な」精神分析批評の系譜に連なるものとは言えない。川中子氏はブルースト自身の伝記的事象を知悉しているにもかかわらず、そのような外的指標をほとんど参照しようとしなからである。ふつうの心理批評家や精神分析家なら、まずは作者ブルーストのたどった精神史に目を向けるであろう。川中子氏にとっては何よりも作品を読み込むことが重要なのだ。たとえ作家の伝記的事実に一瞥を与えてとしても、それは作品の鍵を見つけるためではなく、作品のなかに見出した隠れた構図や無意識のファンタズムと関連づけるためなのである。本書はその見事な実践である。著者の立場は『テキストの無意識』を書いたジャン・ベルマン＝ノエルや、論考「ブルーストとセクシュアリティ」（1971）を書いたフィリップ・ルジュヌヌ、『ブルースト的想像力の諸経路』（1980）の著者ロザスコのそれに近いと言えるだろう。

川中子氏がブルースト的エクリチュールと言う時、それはロラン・バルトの定義（『零度のエクリチュール』）通り、個人的文体でも母語としての言語でもなく、ブルーストが鮮明な意志で選択したひとつの「書く様式」のことをさしている。意図的に、あるいは無意識に隠蔽したさまざまなイメージとファンタズムが、無数の断片となって3千ページのテキストの各所に散在している。川中子氏のまなざしは、はてしなく続くこの地雷原を見渡し、また精密に走査して危険物を同定し、関連づけ、いくつものシステムの束にまとめていくのである。この作業は、傍目からは一見遊戯的な作業のように見えるかもしれないが、じつは原語のニュアンスまで深く読み込む技量なしには成就できないものなのである。

目次を見れば、本書のおおよその内容をつかむことができよう。全体は4章構成である。それぞれ「先のとがったものによる痕」「言葉という食べもの」「住まい探求」「サン・マルク寺院の秘儀」と題されている。また小見出しはテーマを細分割して、イメージや観念の連鎖がどのように働いているかを示唆する。あたかもブルーストの小説じたいのように、本書の各部分は全体につながり、また無数のモチーフが互いに響きあっているので、一部だけを読んで全体を推し量ることはむずかしいし、また逆に著者の全体的な論理構造を最初に提示して、それをもとに各章の断片を整合的に再配置することはもっと困難であろう。本書をよく味わうには、何度も読み直して、四通八達した観念連合の編み目をあちらこちらで拾い、集め、たえず渦を巻くいくつかの動く結節点（たと

えば、地下に眠る女性のイメージ、エロティックな食べもの、内在化されたキリスト教図像学など）を把握して、小説の行間の闇のなかにひろがる心的あるいは身体的な空間を実感するしかないだろう。

とはいいいながら、書評子の役割は本書をすでに味読した読者に、いまさら調理法ないし食し方をあらためて指示することではない。筆者はそのような思い上がりをもつわけでないが、せめて本書をまだ手にしていないこれからの読者のために、より具体的に本書を紹介しておくのもむだではないであろう。そういうわけで、ここでは本書全体のまとめともなり、またもっともその特徴をよくあらわしている最終章「サン・マルク寺院」をとりあげて検討してみることにしたい。そもそもブルーストの『失われた時を求めて』において、ヴェネツィアを中心広場にそびえたつサン・マルク寺院（あるいはサン・マルコ聖堂）は「消え去ったアルベルチーナ」のもっとも重要な磁場を形成している。

主人公と同棲していた恋人アルベルチーナがバリの家から遁走して事故死をとげたあと、彼は傷ついた心を癒すために母とともにヴェネツィアに旅立つ。洗礼堂はヴェネツィアを中心とも言うべき聖堂の一画にある。のちに「見出された時」において主人公は、ゲルマント大公邸の中庭で舗石につまづき、その経験がヴェネツィアの青い空を鮮やかによみがえらせる。というのも石畳が洗礼堂の「段違いの舗石」と同じ感覚をもたらしたからである。この事件をきっかけに、主人公は最終的な啓示に至る。つまり、「書くこと」「書き始めること」をめぐる小説の枢要な主題がサン・マルク寺院に深く関わっているのである。管見によれば、それはブルーストがこの場所を自分の母親の墓廟としたからなのであって、かつて筆者自身、草稿の検討を通してそれを立証しようとしたことがある。いずれにせよ、デコダージュ（暗号解読＝解釈）をおこなう読者の側では伝記的要素・作家の心理などは排除することが可能だが、アンコダージュ（暗号構成＝テキスト構築）をおこなう作家において、そのような峻別は意味をなさない。

さらにまた川中子氏が指摘するように、洗礼堂は、比喩的な意味における主人公の洗礼の場所すなわち死と再生の場所として設定されている。主人公はほのぐらい空間に母と佇み、洗礼者聖ヨハネのモザイク画を凝視する。同氏は洗礼の「水の冷たさ」が大運河の水の冷やかさに、また主人公の寒がりの体質へと連結していること、サン・マルクのMarcという文字が主人公の仮の名前である「マルセル」Marcel をはじめマルサン

ト夫人、モレルといった中心的人物たちの名前のアナグラムとなっていること、ここに描かれた母子の相愛が『失われた時を求めて』に言及されている「トリスタンとイゾー」、「フェードル」などの近親相姦的な神話群と深い関連をもつこと、主人公が聖堂でおこなうラスキン関連の仕事がエクリチュールを介して母親と一体化する作者を指示していることなどを、つぎつぎに指摘するのである。

サン・マルク寺院をおおう死の影はまた作品後半に目立って増えていく死の執念につながっている。著者はこのことを、「死がプログラムとして組み込まれている」エクリチュールの自己破壊作用として説明する。小説の最後で話者が死の接近と競うようにして毎夜作品制作に精を出すのは、エクリチュールが死を呼び寄せるからだ、と言うのである。そして本書の前段で微細にわたり検討が重ねられてきたさまざまな主題が、まるでシンフォニーの終結部のように、雪崩を打ってこの至聖の場所（川中子氏によれば「聖婚」の場所）に四方八方から流れ込んできて、オーケストラを奏でるのだ。このような認識の方法論を貫いてブルーストの作品を読み通すという試みは、わが国でもほとんどされたことのない、快挙である。常識的な評論の再生産に飽きたわれわれを、知的興奮に満ちた世界に誘ってくれるのだから。

もちろん、このような特徴をもつ書物に対して批判を投じることはむずかしくない。おそらくバシュラールやバルト、さらにはドゥルーズ、ルジュンヌらの影響下に出発した著者の「読み」の理念は、こんにちけっして時代をリードするものとは言えなくなっている。その理由の最大のものは、新鮮な観点を提起する自由な発想をもっているだけに、その恣意性・主観性を払拭することができないからである。テキストの精神分析は両刃の剣であって、切れ味がよくてもひとつ間違えると自分がけがをしてしまう、そんな側面をもっているのである。いたるところにセクシュアリテとその表出を見出す鋭いまなざしは、時として幻に操られる危険がないとは言えない。また本書は、ブルーストの精神史や生活史にかかわるさまざまな事象への参照を極力自制しているばかりか、草稿資料・文化的歴史的文脈への言及も局所的である。著者がこのような「外的資料」を手の内に入れていることは明瞭であるが、あえてそれを排除していこうとする姿勢には、驚嘆を覚えるとともに、そこまでする必要がはたしてあるのかどうか、やや疑問に思われなくもない。

とはいえ、これは川中子氏が熟慮の上で選択した方法であって、実証的批評の立場か

らこれを疑問に付すほどおろかなことはない。増殖・蓄積をつづけるブルースト論のなかで、ひとときユニークな「テキストの快樂」を味わわせてくれる点で、本書の貢献はたいへん貴重なものである。あらためてブルーストの広汎な受容と深い影響を実感させてくれる一冊である。